

## 28B-07

## 難治アトピー性皮膚炎の漢方併用療法 —補中益気湯と他方剤の相乗効果とサイトカインの変動—

大阪市立大学 医学部 皮膚科学講座<sup>1)</sup>, 大東市・高橋皮膚科<sup>2)</sup>, 大阪市・山本内科<sup>3)</sup>  
○小林裕美<sup>1)</sup>, 石井正光<sup>1)</sup>, 水野信之<sup>1)</sup>, 寺嶋 亨<sup>1)</sup>, 高橋邦明<sup>2)</sup>, 山本 巖<sup>3)</sup>

【目的】私達は、難治アトピー性皮膚炎に対し補中益気湯をベースとした漢方併用療法を用い治療効果を高めてきた<sup>(1)</sup>。昨年の本会においては、従来の治療による観察期間の後、補中益気湯のみを加え効果が見られた10例について臨床検査値の推移を検討し、好酸球数、血中インターフェロン $\gamma$  (IFN- $\gamma$ )値が治療後いずれも有意に低下することを報告した<sup>(2)</sup>。補中益気湯は内因改善の目的で用い重症例ではしばしば他方剤と併用することが多いため、今回は併用例の各々について臨床症状の推移と血中のサイトカインの変動を検討を加えた。

【対象】症例1：27歳，男性。小児期よりのアトピー性皮膚炎。皮膚科専門医による種々の治療にても軽快せず来院した。初診時，全身に紅斑落屑を認め，前額部はびらんと滲出液が著明であった。前医の弱ステロイド外用は変更せず，抗アレルギー剤内服のみでの観察期間の後，補中益気湯，柴胡加竜骨牡蛎湯，白虎加人参湯を加えたところ，2週間後頃より徐々に軽快してきた。症例2：27歳，女性。20年来のアトピー性皮膚炎。初診の2年前より顔面浮腫を伴う皮疹の増悪をきたすようになった。初診時，全身に紅斑と落屑が認められ，頸部は湿潤性局面を伴っていた。五苓散，黄連解毒湯，補中益気湯などの方剤を症状に応じ選択併用し約半年の間にかかなり軽快。2症例の治療中の臨床症状の推移と血中サイトカインの変動を検討した。

【結果】症例1の増悪時の血中IFN- $\gamma$ は0.4 IU/ml，IL-4値2.3 pg/ml，IL-5値5pg/mlと増加していた。漢方併用2週間後，症状の改善とともにIFN- $\gamma$ 値は0.1以下となり，IL-4，IL-5値も各々2pg/ml以下へと低下した。症例2の治療開始1カ月後，中等症の皮膚症状の残存時にはIFN- $\gamma$ は0.2 IU/ml，IL-4値5.1 pg/ml，IL-10値3 pg/mlと増加していたが，約半年後には，症状は軽快し，IFN- $\gamma$ は0.1以下，IL-4，IL-5値とも2.0以下へと低下が認められた。

【考察および結論】2症例ともに従来の治療に対し難治で長期にわたり皮疹が存続し，血中IFN- $\gamma$ ，IL-4，IL-10の高値が認められていたが，いずれの値も症状の改善とともに低下した。preliminaryな結果ではあるが，これらの症例においては補中益気湯と他方剤の併用が免疫系の調整にも有用であったと考えられた。

(1) 西日本皮膚 51:1003-1013, 1989

(2) Journal of Traditional Medicines 15:310-311, 1998